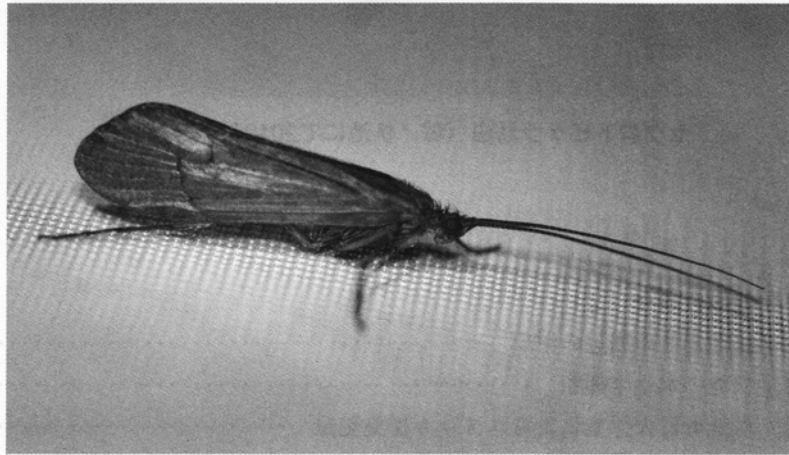


セグロトビケラ *Limnephilus fuscovittatus* (Matsumura, 1904)

幼虫は比較的大型で、冬から春にかけて湖沼のほか河川の緩流部などでも見られる。植物片を縦方向に配列した筒巢を持ち、落葉などを食べている。ため池に生息する大型のトビケラの多くが全国的に減少する中で、この種はまだ比較的普通に見られる。成虫は初夏に羽化するが、その後幼虫も成虫も採集されなくなり、秋になってから成虫が再び出現する。生態の研究はなされていないが、この種の属するキリバナトビケラ属の多くの種が成虫期に夏眠するので、本種もそのような生活史を持つと思われる。この種は日本の昆虫学の開祖ともいわれる松村松年博士により新種記載され、日本人によって学名が与えられた最初のトビケラとなる。和名は原記載文中にある成虫の特徴「・・中胸背ノ中央ニ一黒褐ノ縦條アリ」に由来すると思われるが、全体に茶褐色の体の背中側が濃く見えることから、「背黒」のイメージはぴったりで、野外でも同定できる。



セグロトビケラ成虫

(野崎隆夫)